

=== T A C S 情報 第4号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和8年6月16日
農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過

(1) 気温

5月の平均気温は、19.5℃（対平年差+2.0℃）と平年に比べかなり高かった。
6月上旬の平均気温は、21.6℃（同+1.3℃）と平年並に比べかなり高かった。
6月3半旬の平均気温は、22.3℃（同+1.3℃）と平年に比べ高かった。

(2) 降水量

5月の降水量は、89.0mm（対平年比72%）と平年並であった。
6月上旬の降水量は、39.0mm（同185%）と平年に比べ多かった。
6月3半旬の降水量は、9.0mm（同41%）と平年並であった。

(3) 全天日射量

5月の平均全天日射量は、21.2MJ/m²/日（対平年比115%）と平年に比べかなり多かった。
6月上旬の平均全天日射量は、16.7MJ/m²/日（同85%）と平年に比べ少なかった。
6月3半旬の平均全天日射量は、25.4MJ/m²/日（同145%）と平年に比べかなり多かった。

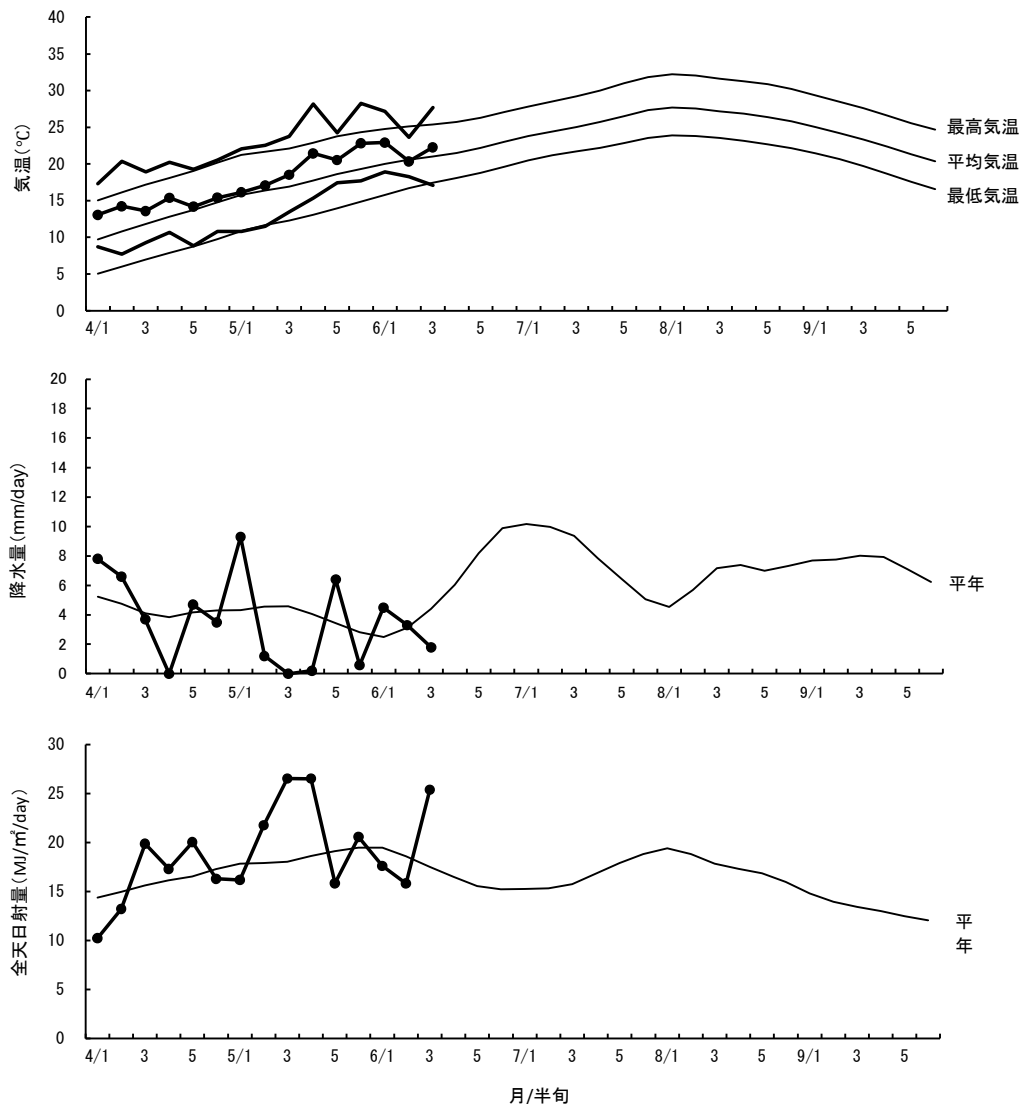


図1 令和8年の気象経過（富山地方气象台）

2 生育状況（生育観測ほデータ）

（1）富富富

近年に比べ、草丈はやや長く、茎数はかなり多く、葉色はやや淡く、葉齢は 0.3 葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、近年に比べ、草丈は並、茎数は多く、葉色はやや淡くなっている。

表1 「富富富」の生育状況（6月16日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD
R8	5月17日	33.5	22.4	502	8.7	4.3	40.1
R7	5月17日	29.8	14.6	321	8.0	4.3	42.7
近年	5月15日	31.3	18.7	402	8.4	4.4	42.1
前年比・差	0	113	153	156	0.7	0.0	-2.6
近年比・差	2	107	120	125	0.3	-0.1	-2.0

注)近年：H29～R7の平均

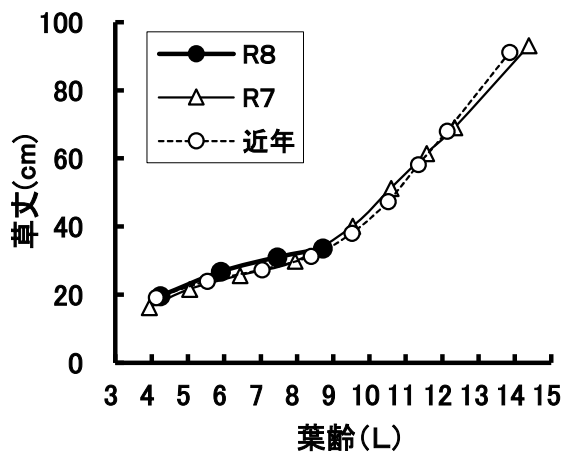


図2 草丈の推移（生観富富富）

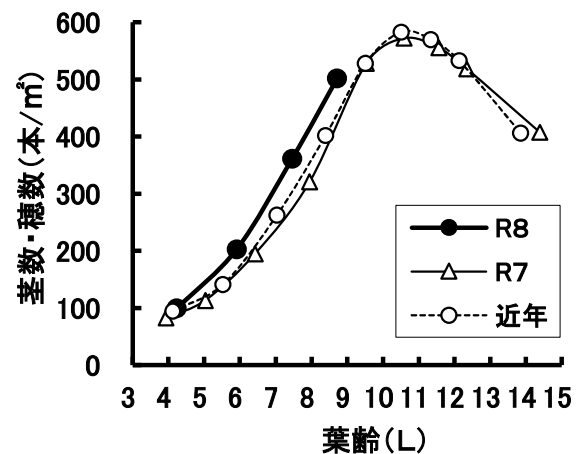


図3 茎数の推移（生観富富富）

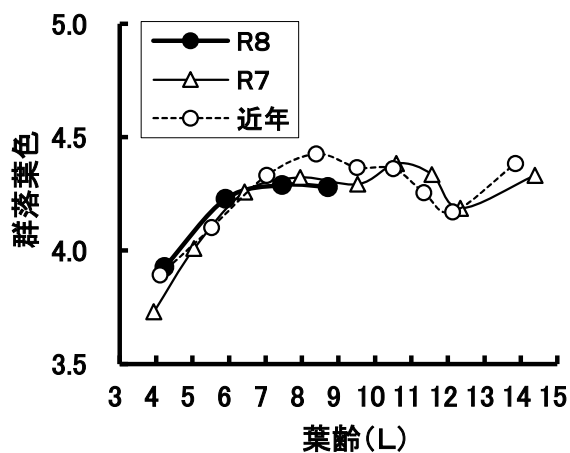


図4 葉色の推移（生観富富富）

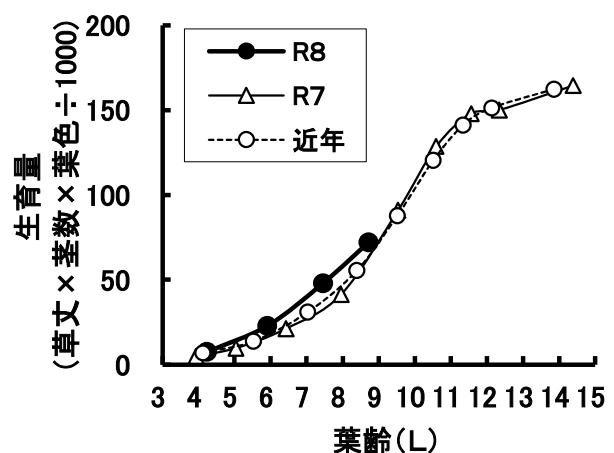


図5 生育量の推移（生観富富富）

(2) コシヒカリ

平年に比べ、草丈は長く、茎数は多く、葉色はやや淡く、葉齢は0.8葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、茎数は並、葉色はやや淡くなっている。

表2 「コシヒカリ」の生育状況（6月16日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD
R8	5月13日	41.1	24.2	515	9.5	4.2	38.7
R7	5月13日	35.6	19.7	433	8.8	4.3	41.1
平年	5月14日	35.9	20.0	438	8.7	4.3	40.6
前年比・差	0	116	123	119	0.7	-0.1	-2.4
平年比・差	-1	115	121	118	0.8	-0.1	-1.9

注) 平年：H28～R7の平均

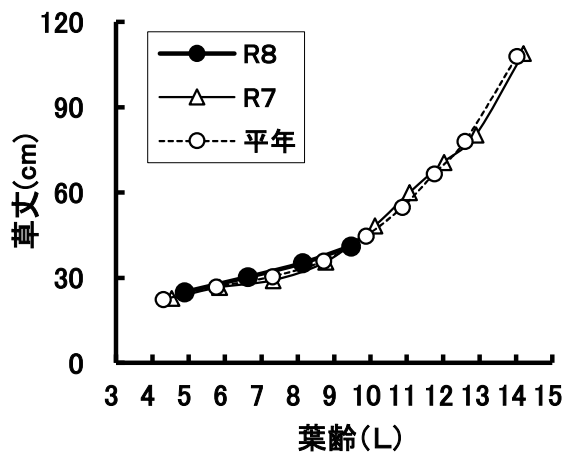


図6 草丈の推移（生観コシヒカリ）

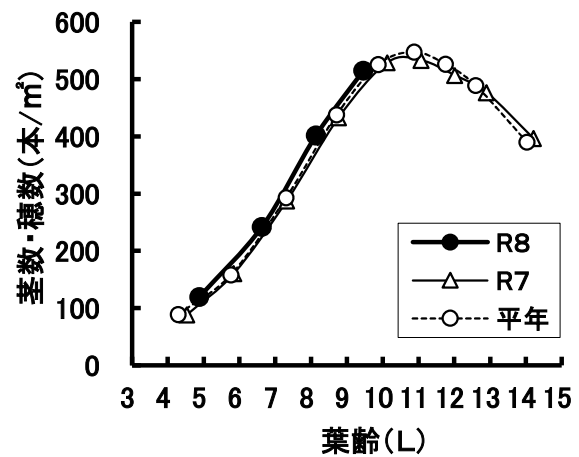


図7 茎数の推移（生観コシヒカリ）

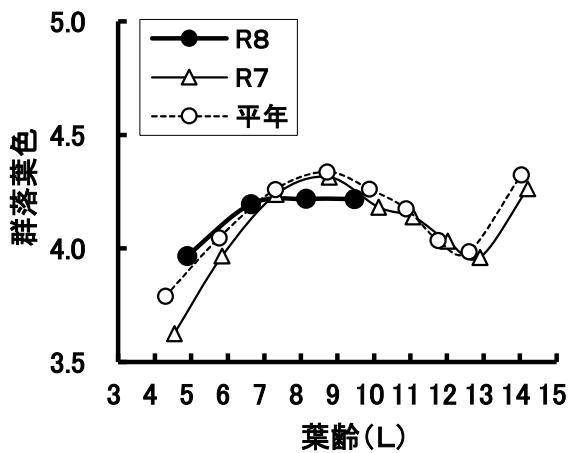


図8 葉色の推移（生観コシヒカリ）

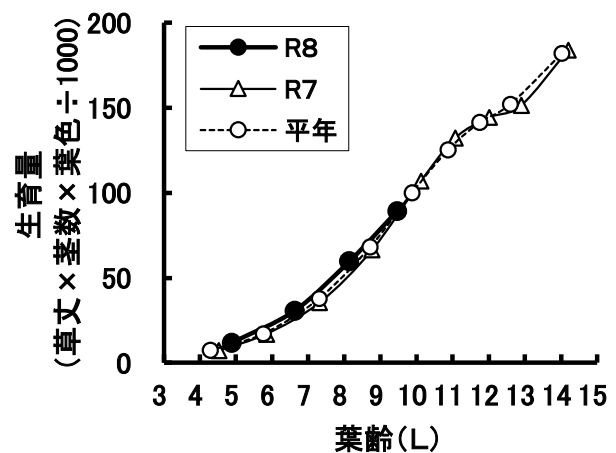


図9 生育量の推移（生観コシヒカリ）

(3) てんたかく

平年に比べ、草丈はかなり長く、茎数は多く、葉色は淡く、葉齢は0.7葉進んでいる。
 葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈は長く、茎数は並、葉色は淡くなっている。

表3 「てんたかく」の生育状況（6月16日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD	
R8	4月29日	52.7	32.5	673	10.7	4.3	40.2	(6月17日)
R7	4月30日	41.3	29.5	606	9.9	4.5	43.0	6月24日
平年	5月1日	41.8	28.3	606	10.0	4.5	42.4	6月24日
前年比・差	-1	128	110	111	0.8	-0.2	-2.8	(-7)
平年比・差	-2	126	115	111	0.7	-0.2	-2.2	(-7)

注1) 平年: H28~R7の平均、ただし、幼穂形成期はR2~7の平均

注2) R8の幼穂形成期は推定値

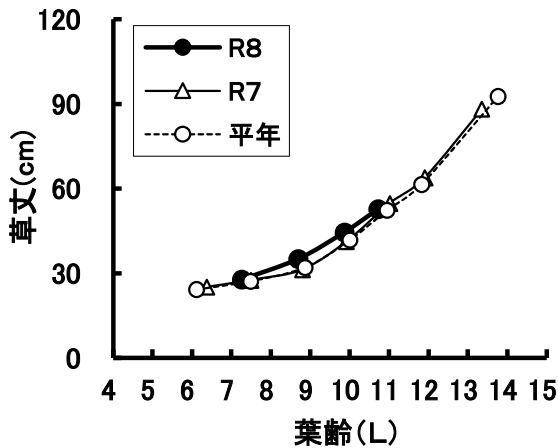


図10 草丈の推移（生観てんたかく）

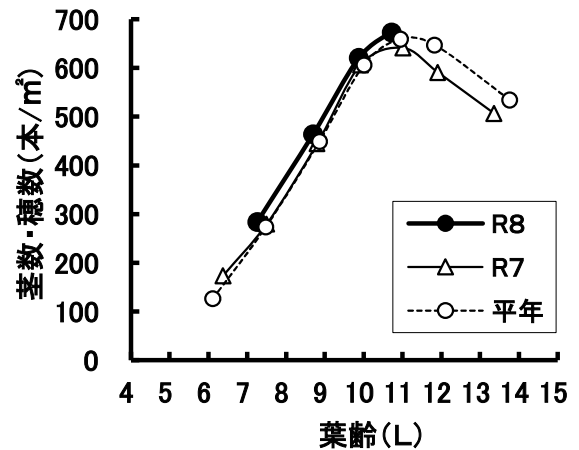


図11 茎数の推移（生観てんたかく）

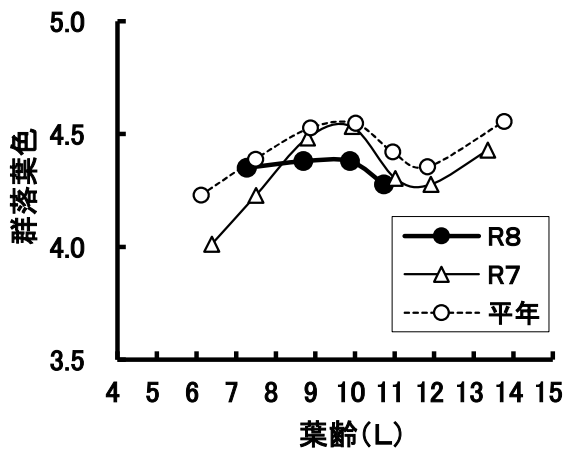


図12 葉色の推移（生観てんたかく）

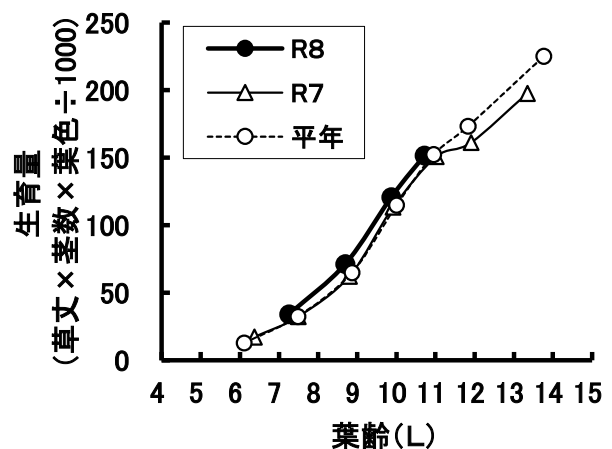


図13 生育量の推移（生観てんたかく）

(4) てんこもり

平年に比べ、草丈は長く、茎数はやや多く、葉色は淡く、葉齢は0.5葉進んでいる。
 葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、茎数は並、葉色は淡くなっている。

表4 「てんこもり」の生育状況(6月16日 生育観測ほ)

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD
R8	5月9日	35.1	29.8	590	10.3	4.2	38.5
R7	5月12日	28.2	20.6	404	8.8	4.3	41.2
平年	5月9日	31.4	28.3	541	9.8	4.4	40.8
前年比・差	-3	124	144	146	1.5	-0.1	-2.7
平年比・差	0	112	105	109	0.5	-0.2	-2.3

注)平年：H28～R7の平均

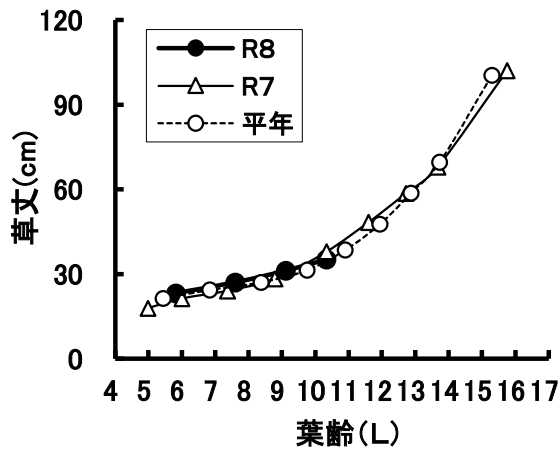


図14 草丈の推移(生観てんこもり)

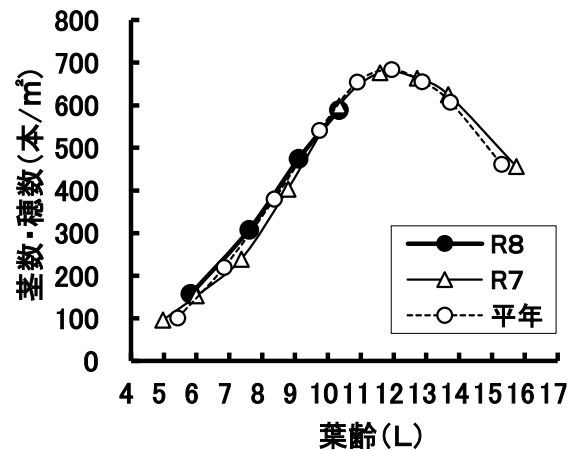


図15 茎数の推移(生観てんこもり)

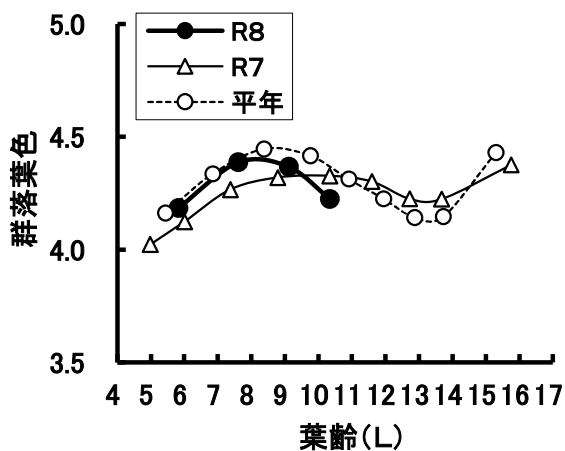


図16 葉色の推移(生観てんこもり)

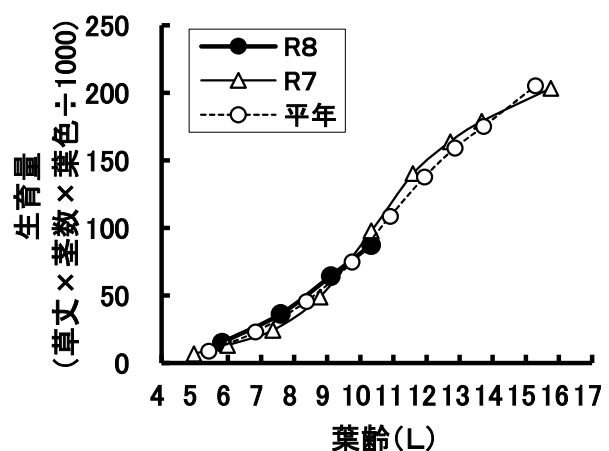


図17 生育量の推移(生観てんこもり)

3 当面の技術対策

- ・現在、生育量が大きくなっていることから、葉色の低下を防ぐため、中干しとその後の間断かん水では、落水期間が長くなり過ぎないように注意し、適正な土壤硬度に誘導する。
- ・早生品種の幼穂形成期がかなり早くなっており、出穂期や成熟期が早まると見込まれることから、防除や刈取り計画の前倒しを検討する。

(1) 中干し後の水管理

- ・中干しは、「田面に小さな亀裂が入る程度」の田干しを数回行い、中干し終了時にほ場中央部でくるぶしまで沈む程度（足跡深さ8～10cm程度）の土壤硬度にする。
- ・葉色の急激な低下を防ぐため、中干し後は間断かん水を行い、幼穂形成期までに足跡深さ3cm程度の土壤硬度とする。
- ・土壌を乾かし過ぎると葉色が低下するため、中干しや間断かん水では落水期間が長くなり過ぎないようにする。特に、中干しが遅れたほ場では、過剰生育によりさらに葉色が低下しやすいことから、肥料を効率良く吸収できるよう、遅くとも穂肥成分が溶出し始める6月下旬までに中干しを終える（図18、表5）。
- ・今後の高温が見込まれることから、幼穂形成期後は飽水管理を確実に実施し、稲体活力を維持する。また、追加穂肥の準備を早めに行う。

<今後の水管理のイメージ>

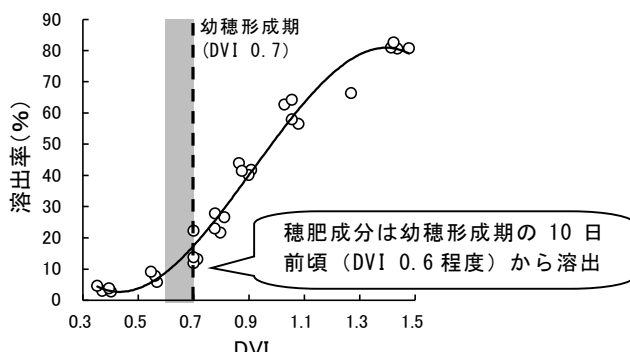
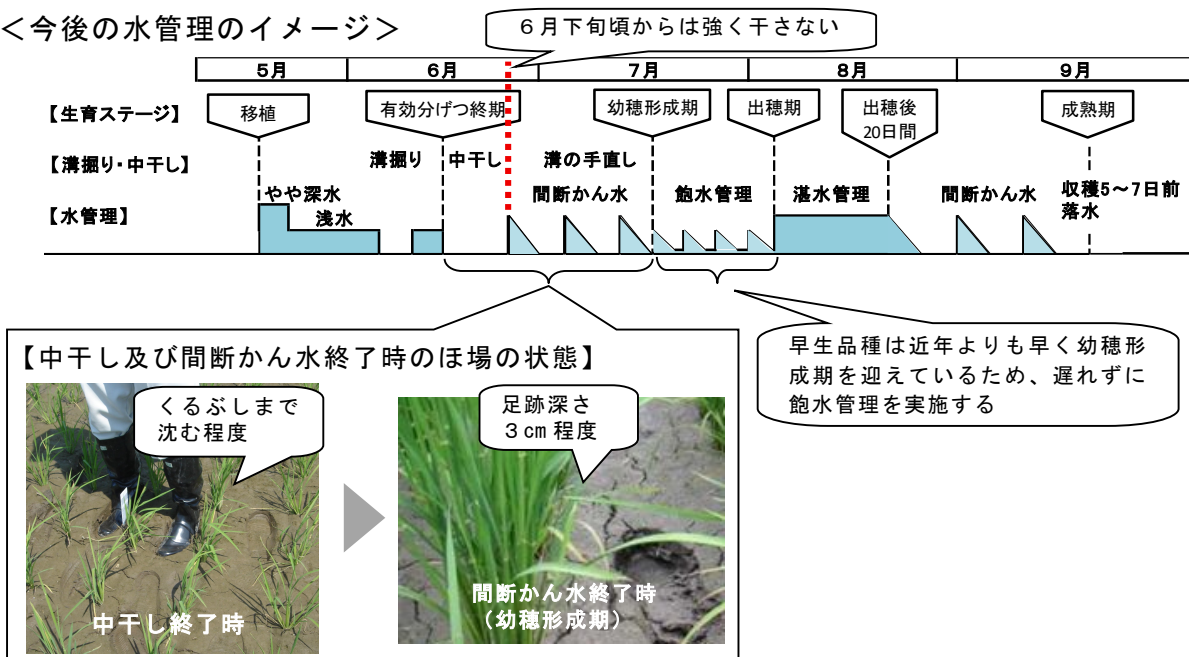


図18 コシヒカリ用肥効調節型基肥肥料の穂肥成分の溶出率の推移 (H29、H30、R2、R3農研)

注) 穂肥成分：JSD(80)、JSE(100)

表5 令和8年度の中干しの開始時期と終了の晩限

田植日 (月/日)	開始時期 (月/日)	終了の晩限 (月/日)
5/10	6/3	6/20
5/15	6/8	6/25
5/20	6/13	6/30

遅くとも肥料の穂肥成分が溶出し始める6月下旬頃には中干しを終える

(2) 「てんたかく」の管理

- ・生育観測ほの幼穂形成期は、近年に比べ7日程度早い6月17日頃と見込まれ、これまでで最も早くなっている（表6）。
- ・出穂期や成熟期が早まると見込まれることから、防除や刈取りの計画を前倒しにするよう検討する（表6）。
- ・肥効調節型基肥栽培では、過剰籾数や倒伏を防ぐため、追肥は原則施用しない。ただし、葉色が4.0（砂壤土4.2）より薄い場合は、速やかに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。
- ・幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため、飽水管理を行う。

表6 「てんたかく」の生育ステージ

年次	田植日	幼穂形成期	出穂期	成熟期
R8	4/29	(6/17)	(7/8)	(8/12)
R7	4/30	6/24	7/13	8/16
R6	5/2	6/25	7/16	8/20
R5	5/3	6/24	7/15	8/16
R4	5/1	6/25	7/14	8/19
R3	5/3	6/27	7/17	8/21
R2	5/2	6/22	7/16	8/23
近年	5/1	6/24	7/15	8/19

注1) 近年はR2～7の平均値

注2) R8の幼穂形成期、出穂期、成熟期は推定値

(括弧書きで記載)

幼穂形成期は、現在の幼穂長より推定。

出穂期及び成熟期は過去の生育ステージを参考に推定。

(3) 「富富富」、「コシヒカリ」の管理

- ・安易な追肥は、過剰籾数や「コシヒカリ」の倒伏を招くので原則施用しない。
- ・作付前にケイ酸質資材や加里資材を散布していないほ場では、積極的にこれらの資材を施用し、稲体の充実を図る。

(4) 「てんこもり」の管理

- ・幼穂形成期前に葉色が4.0（砂壤土4.2）より薄い場合は、速やかに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。

(5) 病虫害防除の徹底

①斑点米カメムシ類

- ・5月下旬の畦畔や雑草地における発生はかなり多く、今後、高温が予報されていることから斑点米カメムシ類の発生量が多くなると見込まれる。
- ・今後の増殖を抑えるため、イネ科雑草が出穂しないように草刈り等による畦畔・雑草地の除草対策を徹底する。
- ・本田内のノビエやホタルイは斑点米カメムシ類の繁殖源となるため、水田内雑草の発生状況に注意し適切な除草対策を行う。
- ・麦あとほ場はカメムシ類の繁殖好適地となるため、雑草が繁茂しないように管理するとともに、積極的に大豆、園芸作物、緑肥等を栽培する。

草刈り運動期間：6月26日（金）～7月5日（日） 一斉草刈り日：6月27日（土）～6月28日（日）
--

- ・早生品種の出穂が平年に比べ7日程度早まることが予想されるため、防除計画を早め、穂揃期（出穂3～5日後）と傾穂期の適期の2回防除を徹底する。また、例年カメムシ類の発生密度が高い地域では、予め追加防除を計画に組み込む。
- ・今年度は草刈運動期間終了と早生品種の出穂の間隔が短く、ほ場へのカメムシ類の飛び込みが懸念されるため、穂揃期防除は遅れずに実施する。

②ニカメイチュウ

- ・要防除水準（防除時6月中旬のさや枯最盛期被害茎率：3%）に基づき防除要否を判定し、適期に防除する。
- ・前年に被害が多く見られた地域では、幼虫の発生がだらつくため、箱施薬剤を施用した場合でも必要に応じて適期に本田防除を行う。

③いもち病（葉いもちの初発確認日 平年：7月9日、R7：7月2日）

- ・箱施薬剤等を施用していない場合は、予防剤を6月中旬頃までに散布する。
- ・BLASTAM情報（農業研究所）を参考に常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生がみられたら直ちに防除する。



④紋枯病（紋枯病の初発確認日 平年：6月27日、R7：7月3日）

- ・前年多発したほ場などでは、出穂3～4週間前の粒剤散布や穂ばらみ期の防除を行う。
- ・本田防除は要防除水準に基づき防除要否を判定し（表7）、適期に薬剤が株元に付着するように散布する。
- ・箱施薬剤と本田防除の体系防除を行う場合は、同一系統薬剤を連用しない。

表7 紋枯病の薬剤散布適期と要防除基準

品種	要防除水準 (発病株率)	薬剤散布適期 (防除要否判定時期)
てんたかく	5%	出穂14日前頃
コシヒカリ・富富富	15%	出穂10日前頃
てんこもり	15%	出穂7日前頃

※てんこもりの要防除水準は暫定値

⑤白葉枯病

- ・常発地等では、出穂3～4週間前にオリゼメート1キロ粒剤等を散布する。
- ・大雨によりほ場が浸水や冠水した場合は、白葉枯病が発生しやすくなるため、薬剤を散布する。